

Que Será, Será

VOL.11
1998
WINTER



瀬在 修介氏 撮影

脳内不安物質とパニック障害

医療法人和楽会 理事長 貝谷久宣



パニック障害が不安神経症とは呼ばれなくなっただけはつきりした理由がいくつかあります。その一つはパニック障害患者の7〜8割の人は、ストレスも悩みも全くない状況で、ある日突然発作が起きるからです。「夕食を終えくつろいだ気持ちでそろそろ床につこうかと、テレビニュースをみていたらいきなり息苦しい感じが襲われました。それがだんだん激しくなりあつという間にもう死ぬのかと思うほど苦しくなつたのです。」

「なぜ?...あんなリラックスした状態で発作が起こる理由がさっぱりわかりません。」と語る患者さんがいます。このように発作を起こす患者さんが大半であることを考えると、精神的に追いつめられて心の悩みが原因となつて発作を起こしているのだとは決して考えられません。このようなタイプのパニック発作は息苦しさで始まることが多いようです。このタイプのパニック障害の原因の一つは炭酸ガスが関係しているようです。リラックス・パニックの患者さんは脳内の炭酸ガス察知機能が生まれつき敏感なようです。ですからこのような人は普段からいつも軽く過呼吸状態になっています。そしてリラックスしたときや夜間睡眠中に呼吸機能が落ち血液の中の炭酸ガス濃度が少し高まると、脳内の炭酸ガス察知装置